

やまの『真宗』のお話

第一回

私達の信奉する宗旨のお名前を「浄土真宗と申します。浄土真宗といふのは、浄土に往生してさとりをひらく、真実の宗旨」といふ意味でありま

「こんなことを申しますと、皆さまから苦情が出ます。「お寺さんの話は口を開けば、浄土とか、往生とかまるで死んだ先のおとぎ話。それちやから今時のものはお寺へ寄りつかないのだ」と。

実は、私も長い間そういう意見を保持していました。お寺に生れ、お仏

飯で育ち、小学校二年の時には、もうお正信（しようしんげ）とあみだ経をクウにおほえ、小さいコロモを着ておつとめに廻っていたこの私でさえ、お寺の本堂の中で聞くお説教はどうしてこんなに実生活に縁の遠いお話なのか。本堂で聞いたことが、家へ帰ったらすぐ役に立つ、そういつたお説教はできないものか。と常々疑問に思っていたのでありますから皆さんがそうお感じになることは決してムリではありません。

落ちついて聞かなければ味がわかりません。そうは言つても今時の忙しい世の中です。手つ取り早く判り易く、真宗の教えを伝える方法をみつけなければなりません。

まだ一度も真宗のお話を聞いたことのない人、仏教のお話を聞きたいが、ヒマがないという人、そういう方々を対象として頭の中にえがきながら筆を進めてゆきたいと思ひます。(つづく)

○お花の奉仕

本町の尾本さん、松田さん等の有志は、毎日五日の月例説教や各法要のたびごとに、どつさりとい抱えのお花をお供えして下さいます。厚く御礼申しあげます。

○お花立の奉仕

本呂尾の藤重さん、松崎の村本勝生さんの両名は、去る五月の降誕法要に献納せられた五具足の新花瓶に、見事な立花式お花立てを奉仕して下さいました。厚く御礼申しあげます。

御芳志

一金三千五百円也(四十九日)
北町 藤重 鎮雄殿
一金千五百円也(年回法事)

- 一金千円也(年回法事) 南町 広本 博殿
- 一金千円也(年回法事) 南町 沖原 周一殿
- 一金千円也(年回法事) 新町 田中 隆生殿
- 一金千円也(年回法事) 泉迫 具田 英雄殿
- 一金千円也(年回法事) 北町 富士川嘉人殿
- 一金千円也(年回法事) 北町 河本 賢一殿
- 一金千円也(年回法事) 北町 銀 寿雄殿
- 由宇 蔵田 信二殿
- 一金三千五百円也(葬儀) 畑 木村 登殿
- 一金千二百円也(年回法事) 大島 田名加 浩殿
- 一金千円也(年回法事) 北町 木村 静雄殿
- 一金二千二百円也(年回法事) 北町 白井 武殿
- 一金三千円也(永代経) 藤生 野原 隆殿
- 一金千円也(年回法事) 北町 小方 初一殿
- 一金三千二百円也(葬儀) 南町 村上 仲殿
- 一金千円也(中陰とりこし) 南町 村上 仲殿
- 一金千円也(年回法事) 本町 土井 逸見殿
- 一金千円也(年回法事) 南町 米本 時雄殿
- 一金千円也(年回法事) 保津 村河 助雄殿

やさしい「真宗」のお話 (才二回)

皆さまの真宗の教えに対する批評をうかがつてみますと、一番根本的なものは、実生活と縁遠いという点とであります。真宗のお話はおとぎ話みたいで、我々の実生活を指導してもらおう教えとして物足らん。すぐに役に立たんということ。これ一体どこに原因があるのでしょうか。これについて私もいろいろ考えてみたのでありますが、結局それは、真宗の教えと私達の生活上の欲求とが喰いちがつているからではないかと思ひます。

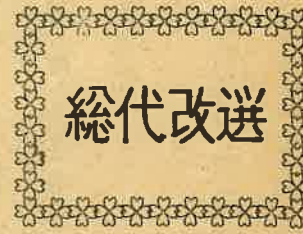
即ち真宗の教えの根本は、「往生極楽の道」を語る事であります。ところが私達はそんな「極楽往生」という様な死んだ先のネゴトに用事はない。聞きたくないといひます。聞きたいのは、今の日暮らしにすぐ役に立つ手つ取り早くて判り易い實際的な教えであることを求めます。例えば、どうしたら人間は仕合おせになるか、どうしたならばなるべく世の為、人の為になるであろうか、どうしたならば我々はもう少し争わずに仲よくしてゆく事ができるであろうか、こういう風な世の中の様々の問題を判り易く解いて、実際に手を取つて指導してくれる。そういつた

教えを私達は期待しています。所が真宗は相も交らず「往生極楽の道」を説いていきます。この様に真宗の教えと我々の生活上の欲求は根本的に喰いちがつております。この喰いちがいがある為に、世人は真宗の教えを指して、實際的でないと結論を下しておられます。特にキリスト教や天理教の如き非常に活動的な宗教団体に比べて、とかく真宗教団が見劣りがするように感じられるのも、多くはこの点にあるようでありませぬ。

それにもかかわらず真宗は相も交らず開祖しんらん聖人の昔から今日まで入れ替り立ち替り往生極楽の道を説いてきました。恐らく将来も永遠に説いていくことでありませぬ。これは一体何とした事でありませぬ。ただ昔からのしきたりであるから仕方なしにそれを守つていられるでしょうか。いえいえ決してそうではありません。それは次の理由によるものであります。

即ち「往生極楽」という一見して我々の生活と縁もユカリもないことが、心の眼を開いてみると、実は私たちの生活上の根本的な欲求と極めて密接な関係があるからであります。

(つづ)



総代改選

前任者の任期満了にともない今般関係者の御推薦により、次の各氏に総代を委嘱することになりましたので、お知らせいたします。

- 今西 孫一 (北町)
- 富土田 完一 (本町)
- 田坂 義雄 (木町)
- 米重 健造 (山田)
- 赤崎 信吾 (保津)
- 岡野 順一 (保津)
- 森田 語一 (青木)
- 藤本 末義 (青木)
- 松本 正一 (黒磯)
- 尾下 悟逸 (黒磯)
- 野原 隆 (藤生)
- 岡迫 益人 (藤生)

(○印は新任)

本堂屋根補修

擬宝珠も元通りに

(一) 本堂の屋根が三ヶ所破損して昨年五月に補修しましたが、またまた別の三ヶ所が破れてツユには雨もりがひどくて困りました。ツユあけと同時に大工さんと左官さんに頼んで補修してもらいました。何分年数の古い本堂ですので、補修、補修でくたびれます。

昨年本堂外縁のギボシユ(唐金青銅)を盗まれて、景観がそくなわれ、惜しまれていきましたが、総代の野原隆さんのお骨折りで、元通り体裁が整いました。今度は盗難を考えて木製にしましたが、一見して、唐金青銅ものと少しも交りませぬ。



やさしい真宗の話 (才四回)

前回までにおいて、『浄土真宗』という宗旨は、『極楽浄土の道』を説く宗旨である。しかし『極楽浄土』と云えば、世人は死後の気楽な所と勝手にきめこんでいます。そこで、真宗で云う『極楽浄土』とは、みなさんが考えている死後の夢の世界とは全然意味が違うのだということをおしえておきました。

なのはそのうした時期の問題よりも、内なる意味についてであるからであります。しかも、その内なる意味が、極楽とは世人の考えている如き、気楽で安気な結構づくめの世界ではないということになれば、一体、どういう世界なのでしょう。

所で、もう一つ、『極楽浄土』に對する新しい誤解が近頃はやつてをります。それは『この世の極楽ぐらし』という訴え方でありませぬ。之は現実主義の現代人には大いにキキメがありそうです。『死んだ先の極楽が何になる。この世の極楽ぐらしこそ信心の本領だ』と叫べば、もうそれだけでやんやのカッサイを浴びせられます。そして、これこそ『生き

た信仰である』とほめたたえられませぬ。しかしこういふ説き方は、どっちかと云えば、人気取りを主眼としたもので、軽々しく受け入れるワケにはゆきませぬ。それと云うのも、『極楽浄土』は時期的に、死後に限つたものではないが、それかと云つて、現世にのみかたよつたものでもないからであります。そして、大切



(つづく)

御芳志

(十一、十二月分)

- | | | | |
|-----------------|-----------|-------------------|-----------|
| 一金二千円也 (年回法事) | 保津 賀屋公之殿 | 一金二千円也 (年回法事) | 藤生 藤中徳一殿 |
| 一金八千円也 (葬儀中陰志) | 青木 尾上慶生殿 | 一金千円也 (年回法事) | 藤生 藤中典殿 |
| 一金千二百円也 (年回法事) | 本町 木村徹殿 | 一金八千円也 (葬儀、永代経) | 北町 松重ハル殿 |
| 一金千円也 (年回法事) | 中町 神田桑一殿 | 一金四千円也 (葬儀) | 新町 津谷哲彦殿 |
| 一金千円也 (年回法事) | 青木 岡村瑞枝殿 | 一金五千円也 (葬儀) | 本呂屋 藤重決殿 |
| 一金二千円也 (年回法事) | 新町 津谷哲彦殿 | 一金千六百円也 (年回法事) | 南町 竹田妙子殿 |
| 一金七千円也 (葬儀中陰志) | 本町 野崎武久殿 | 一金千円也 (年回法事) | 北町 益富輝美殿 |
| 一金二千円也 (永代経) | 藤生 土井吉尾殿 | 一金千三百円也 (年回法事) | 長野 三井佳宣殿 |
| 一金二千三百円也 (年回法事) | 防府市 国佐勇也殿 | 一金六千五百円也 (葬儀、中陰志) | 新町 井原克郎殿 |
| 一金千円也 (永代経志) | 藤生 広中幹彦殿 | 一金千五百円也 (永代経) | 黒磯 藤重静一殿 |
| 一金千円也 (年回法事) | 北町 富士川嘉人殿 | 一金五千円也 (葬儀、永代経) | 郷 河本守殿 |
| 一金千二百円也 (年回法事) | 藤生 藤中典殿 | 一金七千五百円也 (葬儀、永代経) | 藤生 藤中典殿 |
| 一金壹万円也 (葬儀中陰諸志) | 藤生 野原輝人殿 | 一金三千六百円也 (年回法事) | 海土路 田坂真清殿 |
| | | | ハワイ 泉ヨシ殿 |

やさしい 真宗の法

(水五回)

皆さま。御仏壇のおとびらをあけてみて下さい。正面の一番上段にアマタ如来さまの御絵像がかまつておりますので、後光(ゴコウ)を背にしてアマタさまが立っていらしゃいます。この御絵像はアマタさまのお徳をわかりやすく絵であらわしたもので、アマタさまそのもの、本体ではありません。

それではアマタさまの本体は何かと云えば、しんらんさまは「光明」なりとおっしゃいます。そしてそのアマタさまのましますお浄土を「光明土」(コウミョウド)なりとおっしゃっています。

「光明」とは光り、「光明土」とは「光りのくに」という意味であります。

光りと云えば、私達は先づ太陽の光りを思い浮べます。寒い冬が明けて、暖かい春の光りが射し始めると、私達は胸をふくらませて、新しい生活の夢を抱くようになります。まことに春の光りはあらゆる生きものの生命力を呼びまします活気づけてゆきます。

この頃、いななか道を歩いていると

煙のじやがいが、しっかりした茎にこいゝ緑の葉をつけているのが見られます。然し、同じじやがいが、も、ナヤのすみどころが捨てられたぶんは、ひよる長い白い芽をのばしているだけで、煙のじやがいが、いもほどの活気はみじんもありません。それでも、もつとよくよく注意してみると、そのいもの白い芽は、常に光りのさす明かるい方向に向かつてびていきます。

このような事実を見ると、一つの植物が生きゆくためには、どんなに太陽の光りが必要であるかを教えられると共に、そのいもの持つ強い生命力に打たれます。

生命力とは生きゆくチカラであります。単に植物のみならず、あらゆる生きものは、自分のいのちをのぼそうと光りを求め、光りをうけることによつて、いのちを全うさせているのであります。(つづく)

おくやみ

- 十二月七日 藤生 野原 敷殿 二七
- 十一月廿一日 大藤 寺蘭 文左殿 五
- 十一月十三日 南町 竹田 八郎殿 五六
- 十二月十一日 新町 津子ヨウ殿 七一
- 十二月十四日 杏尾 薩 八郎殿 八三

御芳志(月令)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|-------------------|------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|
| 十二月廿二日 黒磯 薩 三郎殿 九四 | 一月廿五日 保津 賀屋 信一殿 八三 | 二月廿四日 青木 藤本 武二殿 七五 | 三月十一日 南町 神田 子殿 三七 | 一月廿六日 海士路 田坂 リヨ殿 八七 | 二月廿一日 藤生 白木 三郎殿 廿一 | 三月十日 山田 上田 得生殿 一八 | 二月廿七日 青木 岡村 定次殿 五九 | 三月十三日 黒磯 山元 正義殿 六三 | 二月廿三日 青木 河本 豊助殿 八二 | 二月廿八日 山田 山田 兼雄殿 九五 | 二月廿六日 本町 国重 一殿 六一 | 二月廿七日 北町 村井 千ノ殿 八三 | 二月廿五日 青木 藤本 勝殿 八二 | 二月廿九日 泉 迫 平吉殿 八七 | 二月廿八日 山田 山田 兼雄殿 九五 | 二月廿七日 青木 岡村 定次殿 五九 | 二月廿六日 本町 国重 一殿 六一 | 二月廿五日 保津 賀屋 信一殿 八三 | 二月廿四日 青木 藤本 武二殿 七五 | 二月廿三日 青木 河本 豊助殿 八二 | 二月廿二日 北町 村井 千ノ殿 八三 | 二月廿一日 藤生 白木 三郎殿 廿一 | 二月二十日 山田 上田 得生殿 一八 | 二月十九日 南町 神田 子殿 三七 | 二月十八日 黒磯 山元 正義殿 六三 |
|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|-------------------|------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|



話の宗の真 (六回)

日も月もホタルの光りさながらに
行く手にミダの光りかがやく

る光りの最も大きなものは太陽—
お日さまの光りであります。この太陽は地上の一切の生き物を照し育てる大きなハタラキを持っています。しかし光りといえ、たと太陽や電燈やロソクの光りのような物質的な光りだけとは限りません。たとえば、草木を照し育てる太陽の光りと同じように、幼な子の成育に注ぐ親の愛情もまたその子にとっては光りでありませす。前者の物質的な光りは肉眼でわかりますが、後者の精神的な光りは心眼を開かなければわかりません。そこで、仏教では前者を「色光」といい、後者を「心光」といいます。

これは昭和二十三年十二月二十三日戦犯として、絞首台の露と消えられた東条英機元大将の辞世の一首であります。東条さんは晩年、花山博士の指導を受けて、真宗の信仰に帰依せられた方でありませす、この歌を詠んで目につくことは、光りという文字が二回も使っていることでもあります。始めの光りはホタルの光り、あとの光りはミダの光りでありませす。ホタルの光りは誰にでもわかりませす、ミダの光りはわかりませせん。それでは「ミダの光り」とは一体何でしょう。之を説明する前に先づ「光り」ということについて少し考え

心光 — 心の光りはわかりやすく二つに分けて考えられます。一つは「希望」「理想」の光りであり、今一つは「めぐみ」の光りであります。前途に希望の光りを仰ぎ、背後のおめぐみに感謝しつつ生きる時、人間は幸福の絶頂にあると云えませす。それは人間は肉体的に生きるばかりでなく、精神的 — 即ち心の光りなくしては生きてゆくことができないからであります。

私達が平生この身にふれて経験す

所で、私達は毎日の生活を果して感謝と喜びの中に生きているでしようか。

御芳志

二月一日
三月二十日

一金	千円也	(永代経)	青木	木村	進殿	一金	五千円也	(葬儀)	青木	藤本	一三殿
一金	千五百円也	(年回)	新町	吉柴	浅一殿	一金	千円也	(年回)	北町	村岡	松子殿
一金	六千円也	(葬儀、中陰)	青木	河本	律雄殿	一金	千二百円也	(年回)	北町	北本	ユキ殿
一金	壹万円也	(葬儀、永代経)	北町	村井	助治殿	一金	千円也	(年回)	海土路	松宮ヒナ代殿	
一金	五千円也	(葬儀、中陰)	青木	岡林	悦香殿	一金	二千円也	(年回)	大藤	小林	勇次殿
一金	二千円也	(永代経)	南町	谷川	谷次殿	一金	二千円也	(永代経)	北海道	水上三代一殿	
一金	壹万円也	(葬儀、永代経)	山田	松村	久雄殿	一金	千円也	(年回)	北町	中柴	内義殿
一金	五千円也	(葬儀、中陰)	藤生	白木	宇一殿	一金	千円也	(年回)	北町	白井	武殿
一金	千二百円也	(年回)	中町	中田	新殿	一金	四千五百円也	(葬儀、中陰)	山田	上田	政雄殿
一金	千円也	(年回)	北町	森脇	久吉殿	一金	千円也	(年回)	黒磯	弘中	正殿
一金	六千円也	(永代経、年回)	北町	富士川	嘉人殿	一金	千円也	(永代経)	黒磯	地中	実殿
一金	千円也	(年回)	保津	畝狭	富次殿	一金	千円也	(年回)	新町	竹原	和勝殿
一金	千円也	(永代経)	黒磯	白木	晋一殿	一金	五千円也	(葬儀)	黒磯	山元	敏男殿
一金	千二百円也	(年回)	黒磯	山元	国雄殿	一金	二千円也	(中陰)	本町	国重	一夫殿

ヤヤしい真宗の話

(オ七回)

御芳志

三月二十日から
五月末日まで

外面如菩薩(ゲメンニヨボサツ)

内心如夜叉(ナイシンニヨヤシヤ)

という言葉があります。これは人間の心のスガタに二通りあることを示したものであります。即ち人間は誰しも人前ではほとけさまのようにとりすましてゐるが心の奥底には恐ろしい鬼の様な心を持つてゐると云う事でありませう。之を判り易く一例を挙げてみますと、キレイな着物を着て、人前でテイネイなアイサツをしてゐる姿がボサツ様、満員列車に我先に早く乗ろうと押しあいへしあいしてゐる姿がヤシヤ鬼。この様な一見して真反対の心を、人間誰でも平気で合せ持つてゐるのであります。

これが外面も、内心も共にボサツさまのような心だけなら問題なく、世の中は極めて明るくほがらかで平和な生活がくりひろげられてゐる事でありませうが、この世に生きてゐる私達の一人一人が全部一人の例外もなく内心に深く鬼の様な恐ろしい根性をかくし持つて、時々かくし切れずにチヨクチヨク顔をのぞかせてゐるから問題があるのであります。この鬼の様な恐ろしい根性を仏教

では我執(ガシユウ)又は無明煩惱

(ムミヨウボンノウ)と云います。

結局、萬物の霊長と云われる人間は、長い歴史の間に多くの偉大な事業をなしとげて来ましたが、その点、人間の理性や美しい情操と云つたものは高く評価せられてゐるのであります。その反面、また多くの悪徳を犯して来ましたが、その代表的なものが「戦争」であります。戦争の原因については、国家間の利害関係の衝突とか、民族思想の相違とか、いろいろ挙げられていますが、根本的なものは、人間の奥深く潜んでゐる「我執」の爆發であります。従つて人間に我執の根性がなくならない限り絶対に戦争はなくなるのであります。

『明るい平和な社会を建設する』と云えば、いかにも立派に聞えますがそれは人間の内奥に潜む恐ろしい我執を知らない人々のネゴトに過ぎません。我執は人間の持つ気高い理想や美しい愛情を一時にして吹きとばす恐ろしい魔力を持つてゐます。理想も、愛情も我執の前には風前の灯であり砂上の楼閣であります。(続)

一金 五千元也 (年回、永代経) 大掛 殿

北町(現人絹町) 蔵重 鎮雄殿 一金 壹千元也 (年回) 山下スマ子殿

黒磯 藤重 春治殿 一金 壹千元也 (年回) 保津

保津 藤生 慶二殿 一金 壹千元也 (年回) 北町 木村 春美殿

藤生 野原 慶二殿 一金 壹千元也 (年回) 青木 重岡 君子殿

藤生 中村ミサ子殿 一金 二千元也 (永代経) 青木 源植殿

青木 中崎徳太郎殿 一金 壹千元也 (年回) ハワイ 高林 義一殿

青木 藤本 末義殿 一金 参千元也 (永代経) 南町 村上 仲殿

青木 米本 島男殿 一金 壹千元也 (永代経) ハワイ 村上 義人殿

青木 松本 重美殿 一金 六千元也 (葬儀、永代経) 青木 島男殿

本呂尾 由宇 中尾 恒輔殿 一金 壹千元也 (年回) 本呂尾 松本 重美殿

保津 赤崎 信吾殿 一金 壹千元也 (年回) 長野 村上 司殿

黒磯 季広 忠七殿 一金 八千元也 (葬儀、中陰) 室木 貞田 直輔殿

壹千元也 (年回) 阿部 殿 一金 五千元也 (葬儀) 青木 井上 正子殿

本呂尾

話の真宗のやさしい

第九回

「やさしい真宗の話」を書き始めてから二年になります。そこで、一応今までのことをかいつまんでふりかえつてみましょう。

私達の信奉する宗旨の名前を浄土真宗と申します。浄土真宗というのは、「浄土に往生してさとりをひらく真実の宗旨」という意味であり、所が、世間では誤まつて、往生成仏とは死ぬることであり、浄土とは死の世界であると考えています。これはとんでもないマチガイであります。

それでは正しい意味の浄土とは何でしょう。「光りのくに」であります。「光り」とは太陽の光線ではありません。「光明は智相なり」と云われている如く「智慧」であります。この光明については前にも少しふれておりましたが、いづれ後日詳しく説明することにして話を進めます。

浄土が光りのくにとすれば、「往

生」の正しい意味は何か。往生とは「光りのくにへ往つて、はとけに生れ変わる」ことであります。その時期はいつか。この世の息をひきとつた時であります。そんなら往生と死ぬることは同じではないか。違います。同じ死んでも、死んだ人が全部そのまま浄土へ往生するとは限りません。どうして？。浄土へ往生するには資格がいるからです。どんな資格がいるのか。専門語で「正定聚」（シヨウジョウジュ）。之を蓮如上人はやさしく「信心の行者」「念仏の行者」と云われています。従つて、この世に生存中「信心の行者」「念仏の行者」であつた人は、息をひきとると同時に浄土へ往生してさとりをひらいてはとけに生れ変わりますが、そうでない人は、再び迷いのヤミの世界へ転落するワケであります。

こんなことを云いますと、それはウソだ、コソラエごとだ、行つて見て来たものがあるワケでなし、死んだ先のことかわかるものかと、心の眼の開いていない人はみんなさういいます。しかし、仏法聴聞に親しんで、はとけさまのチエの光りに育てられて、心の眼の開いた人には、それが明きらかに知られるのであります。

御芳志

(十、十一、十二月份)

一金 壹千三百円也 (年回) 黒 磯 村井 仲人殿 海土路 (年回) 田坂 真清殿

一金 五千円也 (年回) 保津 内藤 重利殿 保津 (年回) 岩本 軍一殿

一金 壹千円也 (永代経) 保津 秋島 勇一殿 藤生 (年回) 野原 輝人殿

一金 壹千円也 (年回) 北町 蔵重 突一殿 海土路 (入仏式) 頼一殿

一金 八千円也 (葬儀、中陰) 保津 松宮 六郎殿 新町 (年回) 津谷 哲彦殿

一金 壹千円也 (永代経) 北町 広中 吉三殿 山田 (年回) 藤重 太市殿

一金 二千円也 (年回) 保津 賀屋 公之殿 黒磯 (年回) 藤重 静一殿

一金 壹千円也 (年回) 北町 松重 ハル殿 新町 (年回) 井原 克郎殿

一金 壹千円也 (年回) 南町 村重 正一殿 山田 (葬儀、永代経) 西岡 甚一殿

一金 二千円也 (年回) 中町 通谷 正純殿 保津 (年回) 村河 助雄殿

一金 五千円也 (葬儀、中陰) 本町 俊則殿 保津 (年回) 村河 助雄殿

一金 壹千円也 (年回) 北町 竹田 若一殿 本町 (永代経外) 田村 義信殿

一金 壹千円也 (年回) 長野 三井 佳宣殿 保津 (年回) 赤崎 久子殿

話の宗の真新しい

10日

の人間は科学智識の発達によつて、すばらしい科学文明をひろげて来ましたが、したがつて、智性によつて万事をとらえてゆくことに大なる自信を持ち、それが習慣性ともなりつつあります。こうした気風によつて、宗教を智的にとらえてゆこうとする傾向のあることは当然のことであり、その意味において、神仏の存在、デゴク極楽の様相が問題に

宗教を語る場合、常に問題となるのは、神仏はあるのか、ないのか、あるいは、デゴク極楽は存在するや否やという点かといふこととあります。そして、或る者は有るといい、或る者はなしと

代風潮として、止むを得ないこととあります。が、然しこれには重大な盲点があります。それはいかなる盲点かと云えば、智的把握の欠陥はと

話か妙にリクツつぼくなりまして、話が、要するに私の云わんとすること、宗教は頭で理解するものでなく、身にかけて体験してゆくものであるということと

青年の宗教講座

浄心仏教青年会(会長賀屋宏昌)では五月十一、十二の二日間、高根顕信師を招いて宗教講座を開き、盛會でありました。

毎月五日の常例説教

毎月五日の昼夜二回、常例説教をつづけています。宗教は「心の喰べもの」「心の洗濯」と云われていま

ヨゴレに気を配る私達です。せめて月一回なりと、お寺の本堂で、心静

かなひとときを持ちたいもので、毎月五日にはぜひお参り下さい。

御 芳 志

一、二月分

一金 壹千円也	青木	(年回)	岩中 政見殿	本町	沼田 ムラ殿
一金 壹千円也	保津	(年回)	賀屋 公之殿	青木	藤本 形一殿
一金 壹千円也	本呂尾	(年回)	村重源太郎殿	清水	武殿
一金 壹千円也	海土路	(年回)	築岡 保殿	北町	村井 助治殿
一金 壹千円也	青木	(年回)	河本 律雄殿	北町	森脇 久吉殿
一金 五千円也	藤生	(年回)	白木ミチエ殿	中町	岡崎 寿夫殿
一金 壹千円也	青木	(年回)	森田 語一殿	青木	森上 光義殿
一金 壹千円也	山田	(年回)	村岡 旭殿	藤生	白木 宇市殿
一金 壹千円也	保津	(年回)	赤崎 久子殿	本町	国重 一夫殿
一金 二千円也	本呂尾	(年回)	竹中 虎夫殿	藤生	白木 静一殿
一金 壹千円也	保津	(年回)	畝狭 富次殿	北町	池本 ニキ殿
一金 三千円也	新町	(年回)	野上 茂殿		

やさしい

真宗の 話

(第 11 回)

しんらんさまは、四十才の頃から九十才の晩年にいたるまで、みづからの信仰を書きつづつた、たくさん

の書物をあらわされました。なかでも「教行信証」(キョウキヨウシンシヨウ)六巻はその中心を

なすもので、浄土真宗の教義が論理正しく書きつづられています。それ故、古来、これこそ浄土真宗の

根本聖典なりとして、「御本典」(ゴホンデン)と呼びならい、格別に尊重しています。所で、この「教行

信証」は、正しくは「顕浄土真実教行証文類」(ケンジョウドシンジツキョウキヨウシヨウモンルイ)とい

うむつかしい名前の漢字で書いた長文の書物であります。しかも、名前や文字だけでなしに、中味もたいへんむつかしい書物であります。徳川時代に、風潭(ホウタン)とい

いに、むつかしくてわからんといつて、サジを投げたと伝えられています。今日でも、専門の仏教学者をしてさえ、むつかしい、むつかしいとタメイキをつかさされる書物であります。

「教行信証」はそれほどむつかしい書物ではありませんが、この書は単なるリクツで固めた仏教哲学書ではありません。この書には一貫した一つの信念が流れています。したがってこれはしんらんさまの「信仰の書」であります。しからばこの書の全編に流れている信念とはいかなるものでありましょうか。

それは「ナムアマミダブツによる以外、人間の救われる道はない」という堅固な信念であります。善人も悪人も、賢い人も愚かなものも、トシヨリも若いものも、男も女も、金持も貧乏人も、強いものも弱いものも、とにかくいかなる境遇のものでも、ナムアマミダブツをおいてほかに、身

も心もほんとうに安らぎを得る世界はないというのが、「教行信証」六巻の全編に流れている信念であります。

御芳志

十、十一月分

す。それはまた、しんらんさまの全人格を流れている信念でもあります。

- 一金 老千五百円也 (年回) 保津住宅 内藤 重利殿
- 一金 老千円也 (年回) 青木 森上 貞一殿
- 一金 老千円也 (年回) 保津 土井 林一殿
- 一金 老万六千円也 (葬儀永代経志) 麻生田 村本 恵美子殿
- 一金 老千円也 (年回) クロイン 藤重 春治殿
- 一金 五千円也 (年回) 北町 多山 松五郎殿
- 一金 参千円也 (葬儀) 青木 藤本 形一殿
- 一金 老千五百円也 (年回) 中町 松岡 雅夫殿
- 一金 式千円也 (年回) 新町 半田 与吉殿
- 一金 式千円也 (年回) 北町 和泉 守殿
- 一金 式千円也 (年回) 藤生 野原 輝人殿
- 一金 老千円也 (年回) 本町 野崎 武久殿
- 一金 老千円也 (年回) 中町 塩中 フサ殿
- 一金 老千円也 (年回) 本呂尾 村重源太郎殿
- 一金 参千円也 (年回) 南町 橋本辰太郎殿
- 一金 参千円也 (年回永代経) 本町 太田 文次殿
- 一金 六千円也 (葬儀志) 本呂尾 広中 勝未殿

話 宗 真 の や さ し い

第 十 二 回

皆さんが真宗の話
を聞いて一番わから
んのは、ホトケ—
ホトケとは一体何か
ということですが、
これがなかなか聞い
ても聞いてもわから
ないのであります。わ
からんに信ぜよ。
わからんに安心せ
よ、というからます
ますわからんように
なるのです。
所で、ホトケとは
何か、実はこれが真
宗の聞き始めて聞き
終りであります。始
めもホトケなら終り
もホトケです。それはどうい
かと思えば、同じ人が同じホトケの
話を聞きながら、始めはチンブンカ
ンブンわからなかつたものが、同じ
ことをくりかえしくりかえし聞いて
聞いて聞き抜くと、まこと、ホトケ
とはこういうお方であつたのかと、
かかるホトケに見こまれたことの、
わが身の仕合せを喜ぶようになる。
つまり、ホトケの徳に打たれるので
す。ここが真宗の終点であります。
昭和二十九年十一月、大阪で死刑
の執行をうけた三谷という青年があ

りました。彼は幼いとき養子にやら
れ、のち罪を重ねて捕えられ、その
犯行の余りのむごたらしさに、遂に
死刑の判決をうけました。その後、
彼は処刑されるまでの二年間、なす
ことのないまま、獄中において俳句
を習い、宗教の話を書きました。最
初に作った句が
菊の花 シヤカもイエスも
クソくらえ
この句でわかるように、彼は世の
中も父母もにくみつけていました。
オレがこんな身になつたのは、幼い
時、オレを養子に出した母のせいだ
ある。世の中が悪いのだと、母をに
くみ、世をのろいつづけていました。
その彼が、俳句を作り宗教の話を書
くことをつづけているうち、最後に
のこした句が、
かみしめる 菊 ひしひしと
母の愛
彼は本来の姿をとりもどしました。
今まで世をのろい、親をうらんでい
た彼が、みづからの罪の深さに目ざ
めたのです。そうした深い心の目ざ
めによつて、同じ人が同じ菊の花を
うたいながら、その心境において天
地の差を生じました。

真宗がホトケに始まりホトケに終
るといつたのは、かかる意味を指し
たのであります。始めチンブンカン
ブンわからなかつたホトケのことが
聞いて聞いて聞き抜くことによつて
深い心が目ざめ、ホトケの徳にうた
れるようになるのです。真宗ではこ
の心の目ざめを『信心』ともうしま
す。

御 芳 志

十二月一日から
一月十日まで

- | | | | |
|-----------------|-----------|----------------|-----------|
| 一金 壹千円也 (年回) | 郷 白田 公美殿 | 一金 壹千円也 (永代経) | 本呂尾 計殿 |
| 一金 六千円也 (葬儀中陰) | 青木 伊一殿 | 一金 壹千円也 (年回) | 泉迫 栄殿 |
| 一金 貳千五百円也 (年回) | 本町 佐々江みよ殿 | 一金 五千円也 (葬儀中陰) | 郷 清水 真澄殿 |
| 一金 壹千円也 (永代経) | 藤生 野原 平一殿 | 一金 壹千円也 (年回) | 南町 米村 儀雄殿 |
| 一金 壹千円也 (おとりこし) | 新町 吉柴 フサ殿 | 一金 貳千円也 (年回) | 南町 広本 博殿 |
| 一金 壹千円也 (年回) | 由宇 角井与太郎殿 | 一金 壹千五百円也 (年回) | 青木 土井 貢殿 |
| 一金 壹千五百円也 (年回) | 北町 広中 吉三殿 | 一金 壹千五百円也 (年回) | 保津 賀屋 友一殿 |
| 一金 壹千五百円也 (年回) | 保津 穴水 伍市殿 | 一金 壹千円也 (年回) | 北町 松重 ハル殿 |
| 一金 壹千三百円也 (年回) | 山田 西岡 甚一殿 | 一金 壹千三百円也 (年回) | 藤生 藤中 英一殿 |
| 一金 貳千円也 (年回) | 青木 森上 光義殿 | 一金 壹千円也 (年回) | 山田 米重 健造殿 |
| 一金 壹千円也 (年回) | 黒磯 藤重 静一殿 | 一金 貳千円也 (年回) | 青木 村岡ムサ才殿 |
| 一金 壹千円也 (年回) | 本町 田村 義信殿 | 一金 壹千円也 (年回) | 青木 木村 源権殿 |
| 一金 壹千円也 (年回) | 由宇 玉中 実殿 | 一金 壹千五百円也 (年回) | 黒磯 藤中 利介殿 |

話 宗 真 の さい や

第三十回

前号の始めにおいで、ホトケの話は聞いても聞いても、よくわからんものだと、いうことを申しました。この場合、わからんというのはいくら本気になつて話を聞いても、ほんとうにホトケを信仰するにいたることが、なかなかむつかしいという意味であります。

そんならどうしてむつかしいのであろうか。どうすればたやすくホトケを信ずることができるのであろうか。真宗の求道者は、この点について深いなやみをもつています。

そこでこれからこの問題について語るわけですが、その前に世間の誤解にまどわされぬように、ホトケの語義について一言しておきます。

『ホトケ』といえば、現代人はいやな顔をします。『インキくさい』『マツコウくさい』『エンギが悪い』と一般に思われがちだからです。中には『ホトケごろを出す』とか

『ホトケさまのような人だ』と、人格的な意味に使っている場合もありますが、多くはインキくさくうけとられていたようです。その極端な例が、亡くなつた人のことを『ホトケ』といい、死ぬることを『お駄仏』(オダブツ)、『とうとうお駄仏した』などといひます。これはとんでもない間違い。仏教では死人のことを『ホトケ』とはいひません。

しからば、ホトケとはいかなる語義か。ホトケの語源は『仏陀』(ブツダ)です。これは古代印度人の言葉でブツダというのを漢字に音表したもので、その音表を略して『仏』(ブツ)といい、これを訳して『覚者』といわれています。『覚者』とはさとれるもの。それは心の眼を開いて、世に目覚めたことをあらわした呼び名です。或いはまた迷いを『解きほどいた』というところから『ほどける』といわれ、それが『ホトケ』と呼ばれるようになったものだと思はれていきます。とにかくホトケについて説明すればキリがないし、また説明しつくされるものではありませんが、ここでは一応ホトケと、死人とはゼンゼン関係がないのだということをあきらかにしておきたいと存じます。

御 芳 志

一月十日から
二月末日まで

一金 壹千円也 (年回)	北町 佐々井 万之殿	北町 村井 助治殿 (年回)
一金 壹万参千円也 (葬儀中陰)	吉兼 一生殿	クロイツ 弘中 磯殿 (年回)
中町 青木 修殿 (年回)	山崎 修殿 (永代経)	山田 松村 久雄殿 (年回)
山田 岡田 清五郎殿 (永代経)	井原 覚殿 (永代経)	北町 鳥越マサノ殿 (年回)
郷 本呂尾 廣中 勝朱殿 (永代経)	高重 一都殿 (年回)	藤生 村井 俊治殿 (年回)
青木 福田 義浩殿 (年回)	森上 光義殿 (年回)	保津 開田 九一郎殿 (年回)
中町 藤木 良一殿 (葬儀中陰)	藤木 良一殿 (葬儀中陰)	藤生 棚田 武殿 (年回)
本呂尾 藤重 決殿 (年回)	藤重 決殿 (年回)	藤生 白木 寿殿 (葬儀中陰)
式千円也	式千円也	青木 高林 雅信殿 (年回)
式千円也	式千円也	本町 土井 秀夫殿 (永代経)
式千円也	式千円也	南町 村重 賢治殿 (永代経)
式千円也	式千円也	北町 木村 静雄殿 (年回)
式千円也	式千円也	青木 棚田 菊月殿 (年回)
式千円也	式千円也	南町 竹田 真殿 (年回)

やさしい 真宗の話

(第15回)

凡夫といえは、
一般にありふれた
人間のことで考え
られています。ど
この町にも、どこ
の村にも、どの
家にも住んでいる
世間のありふれた
人間、それを凡夫、
または凡人として
うけとられていま
す。

しかし、仏教で
いう『凡夫』は人
間の常識でかれこ
れ云つてゐる言葉
ではありません。
それはホトケさまがご自身のサトリ
のチエをもつて、ワレラに示された、
ホトケのチエの言葉であります。さ
れば、これをうけとるには、ワレラ
の心底の自覚によらなければ、その
真意をうけとることはできません。
祖師しんらんさまは、『凡夫』の
二文字を自己の心底の自覚におい
てうけとられたおかげであります。そ
の自覚の言葉こそ、

『凡夫』といは、無明(ムミヨウ)
ボンノウわれらが身にみちみちて、
欲も多く怒り腹立ちをねみねたむ心
ひまなくして、臨終の一念にいたる
までも消えずたえず——』の告白
であります。

この場合、『無明』(ムミヨウ)
の『明』(ミヨウ)は仏教では『真
実のチエ』『サトリのチエ』をいい、
したがつて、『無明』とは『我執』
とも云つて、ワレラのチエが愚かで、
常に真理にさからい、真理にそむい
た生き方をしてゐることをいいます。

『ボンノウ』は本能的欲望。人間
はいろいろの欲を起しては、わが身
をわづらい、わが心を悩ましてゐる
から本能的欲望を『ボンノウ』とい
います。

とにかく『無明ボンノウ』をわか
り易く云えば、何でも自分の思うよ
うにしたいという『自己本位の心』
であり、何事も自分の損得を考えな
ければおれない『自我功利の心』を
いうのであります。

御 芳 志

四月十日から五月十日まで

一金 壹千円也	(年回)	松脇安寿人殿	一金 壹千円也	(年回)	木呂尾	竹中 虎夫殿
クロイン			郷			
南町	(年回)	保殿	青木	(年回)	井原	義郎殿
壹千円也			川崎市	(年回)	森田	語一殿
松崎	(年回)	保殿	青木	(年回)	森上	光義殿
八千円也			泉追	(先祖)	吳田	光徹殿
南町	(葬儀中陰)	保殿	北町	(年回)	吉柴	フサ殿
			大藤	(年回)	岡林	洋二殿
保津	(葬儀、永代経、中陰外)	榎島 浦一殿	壹千円也			
藤生	(年回)	白木 寿殿	壹千円也			
山田	(年回)	藤川 義生殿	壹千円也			
山田	(年回)	米田 伎殿	壹千円也			
保津	(年回)	畝狭 藤人殿	壹千円也			
青木	(年回)	岩中 都守殿	壹千円也			
			松崎	(年回)	清水	武殿

やさしい真宗の話し

(第十六回)

昨日といい、今日とくらししてあすか川、流れて早き月日なりけり
 今年もはや暮れなるといします。お正月もちをたべたのが、ついでこの間のようにあります。間もなく新しい年を迎えて、また新しい正月もちであります。

蓮如上人の御文章に

「それ秋も去り春も去りて、年月を送ること昨日もすぎ今日もすぐ。いつのまにかは年老のつもるらんとも覚えず知らざりき」とあります。まことにあってあわただしきものです。しかも年月のたつのが、あわただしいだけではありません。日頃のくらしのあとをふりかえってみると、同じ御文章に

「ただいたずらにあかし、いたづらにくらして、老いのシラガとなり果てぬる身のありさまこそ悲しけれ

それは、七十年の生涯をただむなしく過ごしたというくやみが残っているだけであります。それは私達の生きる道に対するさびしいまじめ

であります。二度と再び生まれるかどうかからんこの人間界の一生を、ただ一休禪師の示めされたように世の中は、食うてかせいでまた食うて、さてそのあとは死ぬるばかり

それでよいものであろうか。何かもつと、ネウチのある尊い生き方はないものであろうか。このネウチのある尊い生き方について、静かに考えてみたいものです。

祖師しんらんさまは、そうしたネウチのある尊い生き方をするには、「真実の生命力」を体得しなければならぬことを、自らの体験を通じてワレラに教えられています。「真実の生命力」それはいづくにあるか。それは「ナムアマダブツ」のホトケのみ名の中にこめられてあります。しんらんさま九十年の生涯の御苦労は、実にこの「真実の生命力」が「ナムアマダブツ」の中にこめられてあることを明らかにすることでありま

御芳志

五月十日より
九月末日まで

○年回志		○永代経志	
一金 貳千円也	松重 武一殿	一金 五千円也	河本 勝一殿
一金 壹千五百円也	高島 文子殿	一金 四千円也	米重久太郎殿
一金 壹千円也	柵田 菊月殿	一金 壹千円也	松本 正一殿
一金 壹千五百円也	村上 司殿	一金 壹千円也	国重 一夫殿
一金 壹千円也	村重 賢治殿	一金 貳千円也	岡部 定殿
一金 壹千円也	井上 正子殿	一金 五千円也	福原 種雄殿
一金 壹千五百円也	吉柴 浅一殿	一金 壹千円也	弘中 文介殿
一金 壹千五百円也	有田 吾一殿	藤生	白木 サト殿
一金 壹千円也	津谷 哲彦殿		
一金 壹千円也	畝狭 富次殿		
一金 壹千円也	野原 信康殿		
○ 葬儀・中陰志			
一金 壹千円也	村本 数一殿	南町	村重 由隆殿
一金 壹千円也	大崎 文雄殿	保津	賀屋 市郎殿
一金 壹千五百円也	井原 克郎殿	保津	村上 金之殿
一金 貳千円也	富士田 完一殿	保津	水上 金之殿
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	米本 時雄殿	保津	宮本 伍一殿
一金 壹千円也	小方 初一殿	クロイソ	
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	石垣 常美殿	八千円也	村重源太郎殿
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	村重 由隆殿	本呂尾	村重源太郎殿
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	松重 ハル殿	藤生	藤重 唯義殿
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	村重源太郎殿		
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	和泉 国雄殿		
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千円也	田中 隆男殿		
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千五百円也	村本才一郎殿		
○ 葬儀・永代経志			
一金 壹千五百円也	有田 吾一殿		

やさしい真宗の話

第十七回

先日、広島の前町にある洗心書房に立ちよった時のことあります。洗心書房は仏教書専門の書店であります。書棚の新刊書をあれこれ調べている時に、一人の中年の会社員風の人が、書店の主人と話を交わしておられるのが、ふと耳に入りました。なんでもその会社員の方は、さる

大会社の勤務関係の仕事をしてる方らしく会社の図書室に置いて従業員の方に読ませたいから何か適当な宗教本を世話してくれとのことでありました。そのあとで、その方は、自分は毎日曜日の朝送されるラジオ中国の本願寺の時間を愛聴している。聞いてみるとなかなか生活の上に参考になることが多いといったような意味のことを主人に話しておられました。

私は今時珍しき人があるものかなとその人のうしろ姿をしげしげ眺めていましたが、ふと気がついたことは、その人が語られた『なかなか生活の上に参考になる、役に立つ』という言葉が妙に気に入って、心の片すみにしこりとなつてのこったことでもあります。それは外でもありません。現代思

潮の特色である『現実主義』——それはそれなりに意義のあることではあります。——の風潮が近頃宗教の世界にまで持ちこまれてくることにどういふカタチにおいて現われているかと申しますと、いわゆる『御利益』(ゴリヤク)主義であります。この宗教を信仰したらたち所にかくかくのご利益があるという御利益主義であります。

例えば、病気がなおる、運が開ける、家庭が円満になる、お金が儲かる。誰もが飛びつきたいようない文句が宣伝せられてるものではないです。

所が、正統の伝教はかかるうたい文句を無視して、昔から仏教の目的、本分、本領は『転迷開悟』(テンメイカイゴ)『生死解脱』(シヨウジゲダツ)にありと、大きなカンパンをかかれています。こうなるともう普通の人は何のことやらチンパンカンパンわからず、気の早い人は、仏教は古い、現代的でない。もうじき亡びてしまうものだとかンタンに片づけてしまします。

しかし、正統仏教のカンパンにはそうカンタンに片づけれない。余りにも深くして広い意味をふくんでいます。その意味をこれからよくよく聞いていただきたいと存じます。

(つづく)

御 芳 志

◎ 年 回 志

- 一金 壹千円也 畝狭 勘一殿
- 一金 壹千参百円也 内藤 重利殿
- 一金 壹千円也 岡崎 寿夫殿
- 一金 壹千円也 尾上 慶生殿
- 一金 貳千五百円也 北本 近衛殿
- 一金 参千円也 村本 頼一殿
- 一金 壹千円也 穴水 徳幸殿
- 一金 壹千円也 藤本 形一殿
- 一金 壹千五百円也 森本 正人殿
- 赤崎 信吾殿
- 広本 博殿
- 谷林 豊殿
- 沼田 信雄殿
- 土井 英和殿
- 大崎 忠雄殿
- 半田 与吉殿
- 山中 寅男殿
- 重岡 豊殿
- 岩中 都守殿
- 米本 明殿
- 森山 芦太郎殿
- 玉中 実殿
- 田村 義信殿
- 西岡 甚一殿
- 竹重 一枚殿

十 月
十 月
十 月

◎ 永代経志

- 一金 貳千円也 富士川嘉人殿
- 一金 壹千円也 藤重 決殿
- 一金 壹千円也 藤尾 正義殿
- 一金 壹千円也 石垣 常美殿

◎ 葬儀、永代経、中陰志

- 一金 参 万円也 藤生 岡迫 孝雄殿
- 赤崎 信吾殿
- 保津 松重 武男殿
- 北 町 河本 賢一殿
- 青木 木村 猛殿
- ◎ 葬儀、中陰志
- 保津 豊殿
- 岩中 都守殿
- 米本 明殿
- 森山 芦太郎殿
- 玉中 実殿
- 田村 義信殿
- 西岡 甚一殿
- 竹重 一枚殿
- 南 町 吉兼 貞子殿

話の真宗のやさしい

・この間、ある人から、「宗教を信
仰しなくてもメシが喰えないとい
うことはないし、又、世の中が乱れる
ということもない。さすれば、ワシ
ラの人生生活にあって、とりたてて
宗教を信仰する必要はないと思うが
どうか—」という御
意見をうかがったこと
があります。かかる御
意見は恐らく今日の人
々の大多数の考えを代
表しているように思わ
れます。

そこで、このたびは
この御意見についてお
答えするワケでありま
すが、その前に、私達
は先ず「生活」とい
うコトバについて考
えてみたいと思いま
す。「生活」というコ
トバは私達が日常ふん
だんに使うコトバであ
ります。「生活のため
に金もうけをする—」
というふうなコトバ
は、同時に、このコ
トバの意味は、わが
身を養い、家族を養
うために、喰うて、
寝て、起きて、働いて
いるコトバである。

・この間、ある人から、「宗教を信
仰しなくてもメシが喰えないとい
うことはないし、又、世の中が乱れる
ということもない。さすれば、ワシ
ラの人生生活にあって、とりたてて
宗教を信仰する必要はないと思うが
どうか—」という御
意見をうかがったこと
があります。かかる御
意見は恐らく今日の人
々の大多数の考えを代
表しているように思わ
れます。

あります。

所で、問題は、ナルホド私達は、
生活のために毎日ねてもさめても苦
勞しているワケであります。そん
なら、喰うて、寝て、起きて、働い
ている生活の動作そのものが、果し
てワレワレの生活の全部であらうか
ということでありま

西洋の有名な言葉に、「人間はパン
なくしては生きられず、されど、
パンのみにては生きられず」とい
うのがあります。これは人間の「生活
」の意味を巧みに言いあらわした言
葉であると思えます。「人間はパン
なくしては生きられず」ということ
は、「人間は喰わねば生きてゆけん
」ということでしょう。これはマチ
ガイのない事実です。私達は一日喰
わねば、もうそれだけで、カラダの
チカラが抜けて、元気に生きてはゆ
かれません。次に「されど、パンの
みにては生きられず」とは、人間喰
わねば生きてゆけんが、そんなら喰
いさえすれば、それで満足している
かと云えば、それだけでは、なんと
なく心落ちつかぬものである。心の
底でも一つ精神的な落ちつき、心
の安らぎ、そういったものをひそか
にこいねごうているという意味であ
りましよう。されば、人間は喰うこ
とのネガイと、心の安らぎをうるこ

とのネガイと、心の安らぎをうるこ
ちつづけて生きている動物である
ということが云えます。これが人間の
「生活」というコトバの持っている
意味であります。

と、この二つのネガイを持
ちつづけて生きている動物である
ということが云えます。これが人間の
「生活」というコトバの持っている
意味であります。

所が、私達は「生活」とい
え、喰うことの一面に重点を置いて、
もう一面の「心の安らぎ」ということ
については割合無関心であります。
宗教は「心の安らぎ」を解決するこ
とを使命としています。それ故、「
生活」ということを「喰うこと」に
のみ限定すれば「喰うこと」の道に
おいては宗教はチカラの弱いもので
あるかも知れませんが、「生活」の
も一つの面である「心の安らぎ」を
うることに思いを致す時、宗教を信
仰することは大きな意味を持てま
す。

御 芳 志

◎ 年 回 志

- 一金 壹千円也 本井 ツネ殿
- 一金 貳千円也 弘本 館一殿
- 一金 壹千五百円也 野原 将伸殿
- 一金 貳千円也 榊本 保殿
- 一金 貳千円也 有田 吾一殿
- 一金 貳千五百円也 高重 力殿

◎ 永 代 経 志

- 一金 貳千円也 河本ミサヨ殿
- 一金 壹千円也 赤崎 久子殿
- ◎ 葬 儀 志
- 一金 壹万五千円也 保津 賀屋 正雄殿

◎ 葬 儀 永 代 経 志

- 御鉢米 壹俵
- 一金 五千円也 本呂尾 藤中 照人殿

- 一金 壹千円也 倉田 隣一殿
- 一金 壹千五百円也 村上 司殿
- 一金 四千円也 森上 貞一殿
- 一金 貳千円也 野原 信康殿
- 一金 壹千五百円也 山元 浩殿
- 一金 參千円也 崎本 高市殿
- 一金 貳千円也 山本 護殿
- 一金 貳千五百円也 榊島 浦一殿
- 一金 壹千円也 広本 博殿
- 一金 壹千円也 森脇 久吉殿
- 一金 壹千円也 白田 博殿
- 一金 壹千円也 角井弥太郎殿
- 一金 壹千円也 池田 信義殿

わたくし、夏宗の話

(第20回)

現代の人々がもっとも頭を使い、心をわづらわしているものは、「生活問題」であるといわれています。それほど私達にとって、現前の「生活問題」は大切な問題であり、これを離れて私達の生きる道はないよう

であります。しかし、仏教では、この「生活」というコトバを、単に「メシを喰う」と「カネをもうける」とこの等

のせまい意味にうけとらずに、もっと広い意味に考えています。私達は「生活」「生活」とこれを一口に呼

んで、常にさかんに使っています。そして、「生」も「活」も一つのこ

とに考えていますが、本来、「生」「活」とは違うのです。例えば、食

える食えぬ、病気健康、金が無い等、そういう問題は「活」の問題であり

ます。しかし、その根底には「生」の問題があることを忘れてはなりません。「活」というのは「活(イ)

それは「生まれた」「ワレ人としてこの世にうまれたり」の上でのこと

であります。うまれたが故にいきる問題がでてきたのです。人間にうま

れたこと、いかなる因縁(インネン)によるものか、今日、この時、この世にうまれあわせている――この

のゲンシユクなる事実のあとに、いきる問題があります。これを一本の樹木にたとえれば、

『いかにいきるか』という「活」の問題は枝や葉にあたります。これに

対し、「ワレ人としてこの世にうまれたり」の「生」は根にあたります。根は常に地中にかくれて見えません。

枝葉は地上に茂って目につきやすくあります。見えないが故に根の存在は忘れがちであります。しかし、枝

や葉が茂っていることは、根のあるシヨウコであります。仏教が人生の根本問題を解決する

る「生まれた」という不思議な事象を見落すと、人間の生活は、単に「喰うて、ねて、起きて、働いて、さ

御 芳 志

一、本麻 白衣地 壹反
本町 御神村 ムラ殿

◎年 回 志

一金 五千五百円也

北 町

一金 貳千円也

一金 壹千五百円也

一金 壹千二百円也

一金 壹千円也

一金 壹千円也

一金 貳千円也

一金 貳千円也

一金 壹千五百円也

一金 貳千円也

一金 貳千円也

一金 貳千円也

一金 壹千円也

一金 壹千円也

一金 壹千円也

一金 壹千円也

多山松五郎殿

岡村 哲夫殿

棚田 武殿

益富 輝美殿

岡林 宇一殿

谷林 豊殿

西岡 甚一殿

佐々井万之殿

村重 由隆殿

吉柴 浅一殿

野原 博司殿

土井猪之助殿

谷岡 年生殿

米田 伎殿

河本 賢一殿

山下スマ子殿

◎永代経志

一金 五千円也

ハワイ

一金 貳千円也

クロイン

◎葬儀

中除 永代経志

保津

◎葬儀

中除志

クロイン

保津

父のため

藤木 克己殿

妻のため

保津 敬狭 卯吉殿

先祖のため

竹田ヒヤク殿

亡意のため

藤中 利介殿

祖母のため

穴水 徳幸殿

喜一殿

信二殿

常雄殿

洋二殿

市郎殿

和久殿

博殿

静雄殿

金之殿

文次殿

野上 和夫殿

橋本辰太郎殿

白田 博殿

村重 賢治殿

白木 賢殿

村上 賢治殿

水上 金之殿

太田 文次殿

木村 静雄殿

村上 博殿

土井 和久殿

賀屋 市郎殿

岡林 洋二殿

吉柴 常雄殿

蔵田 信二殿

土井 喜一殿

話の真宗の

(第 2 1 回)

近頃、テレビを見て時々思いにふけることがあります。それは大都會の通勤時の混雑です。押しあいへしあいの人の流れが、画面をゆさぶるのを見る時、この人たちは、朝起きて、朝食をとり、会社や銀行や工場に働いて、仕事が終れば疲れて帰る。夕食をとって眠れば、翌朝がまっています。

働いて、喰べて、寝て、日夜を過ごしているこの人たちは、一体何を考え、何を思っている人生を送っているのでしょうか。ナルホド、若い人達には海山に遊び、映画を見たり、音楽を聞いたり、恋人とデートする楽しみもあるでしょう。しかし、それとても所詮「若い時」の楽しみで、年老いた先まで持ちこせるものではありません。

そうしてみると、人間は暮しの中にまことの生き甲斐を見出すことは至難のようでありませぬ。

ある書物で、囚人の話を読みました。この囚人は重罪を犯したため、三十年の刑を言い渡され、刑務所に

入れられていました。独房のなかで、世をうらみ、人をのろい、おのれの身の不仕合せをはかんでいました。が、ある時、一匹のアリを見つけ、生きてゆく道を発見しました。十年の間に、囚人はこのアリに、立って歩くことを教えました。次の十年間に、アリは、囚人の掌の上で、口笛を聞いてダンスを踊るようになりました。囚人は刑務所の不自由な苦しみ忘れて、その日その日がうれしくすごされました。最後の十年にアリは囚人のコトバがわかるようになってきました。

ある日、独房の小さな窓からさしこんでくる太陽の光りのなかで、アリの話をしていた囚人は、忘れていた出獄の命令をうけたということになります。

私はこの本を読んで深い感動に沈みました。そして、人間のまことの生き甲斐というものは、案外、身のささやかなるものの上に感ぜられるものであることに今更ながら驚いたのであります。

私達の祖師しんらんさまは、「ナムアマミダブツ」の六字のみ名に、あいたてまつったことよって、全生涯の生甲斐を見出だされました。ナ

ムアマミダブツは単なるマジナイコトバではございません。この六字のみ名のなかには、みほとけのいのちと光りがこめられています。それは、ナムアマミダブツのいわれを辛抱強く聞き抜くことよって、あきらかになるのであります。

御 芳 志

◎ 年 回 志

- 一金 千三百円也 土井 高見殿
- 一金 壹千円也 松中 保殿
- 一金 三千円也 白木 サト殿
- 一金 二千円也 森上 光義殿
- 一金 二千円也 村上 実殿
- 一金 三千円也 布重 泰彦殿
- 一金 壹千円也 布重 増吉殿
- 一金 二千円也 白井 武殿
- 一金 壹千円也 松重三代太殿
- 一金 二千円也 富士田完一殿
- 一金 二千円也 大崎 忠夫殿
- 一金 千三百円也 藤中 英一殿
- 一金 千五百円也 田中 隆男殿
- 一金 壹千円也 佐々江健治殿
- 一金 二千円也 野原 将伸殿

◎ 葬儀 中陰志

- 一金 壹千円也 藤重 唯義殿
- 一金 壹千円也 真田 陸生殿
- 一金 壹千円也 三井 佳宣殿
- 一金 千七百円也 弘中 一式殿
- 一金 千二百円也 伊ヶ崎正良殿
- 一金 壹千円也 三井 繁殿
- 一金 千二百円也 赤崎 信吾殿
- 一金 二千円也 重村 保殿
- 一金 二千円也 竹原 和勝殿
- 一金 二千円也 河村 弥一殿
- 一金 七千五百円 母のため
- 一金 本町 大原 園江殿
- 一金 壹万壹千円也 妻のため
- 保津 山本八州人殿
- ◎ 葬儀、永代経、中陰志
- 一金 壹万八千円也 妻のため
- 中町 弘中 文介殿
- 一金 貳万五千円也 妻のため
- 保津 村河 助雄殿

話の真宗のやさしい

回 2 2 オ

新しい年があけて、昭和三十七年が始まりました。私達は今年の一年をどういうスガタで送ればよいでしょうか。

西洋のある童話に、水スマシとコドモの問答がでています。

『水スマシさん、あなたは年から年中、水の上をぐるぐるまわってばかりいるが、なんのためにまわっているのですか』

『なんのためか、私自身にもわからないがただこうして廻るのが私の性分です』

この問答を反対にして、同じことを水スマシが人間にたづねたとしたらどうでしょう。

『人間さん、人間さん、あなたがたは年から年の中いそがしい、いそがしいでぐるぐる廻って年をとっているが、なんのために生きていますか』

この問に対し私達は一体なんと答えればよいのでしょうか。

蓮如上人は御文章(ゴブンショウ)の中で『ただいたづらにあかし、いたづらに暮らして、老いのシラガ

となりはてぬる身のありさまこそ悲しけれ：』と嘆かれています。

仏教ではホトケさまのおはたらきを『心光』と申します。それは、ホトケさまの教えはあたかも暗い夜道を照らす街灯の如きもので、ワレラの心の光りとなるという意味であります。

不平がおこった時、腹がたった時、お金に困った時、病気にかゝった時、不幸災難にあった時、淋しくなった時、世の中がわからなくなった時、死にたくなかった時、人が憎らしくなった時、そんな時に私達の心の光りとなるためにできているのがホトケさまの教えであります。そのホトケさまの教えは『聞法』(モンボウ)といつて、仏教の信仰書を読むか、その道の専門家や信仰者の話を聞いて、うけとるのが一番手っとり早くあります。

私達の祖師しんらんさまも『聞法者』でありました。二生涯、みほとけの教えに親しんだおかたであります。私は年頭に当り、『聞法』の二文字を私自身の目標にすることを誓いました。聞いて聞いて聞き抜く。これが私の年頭の標語であります。私と共に『聞法』の二文字をムネとする同行さんの一人でも多からんことをねがっています。

御芳志

八月十五日より
九月末日まで

◎年回志

- 一金 二千元也 正木 義教殿
- 一金 壹千円也 高林 勇二殿
- 一金 壹千円也 森上 貞一殿
- 一金 壹千円也 松井 常一殿
- 一金 壹千円也 松本 勘一殿
- 一金 壹千円也 沖好 繁殿
- 一金 壹千円也 藤中 助生殿
- 一金 二千元也 池本 ユキ殿
- 一金 二千元也 竹重 一枝殿
- 一金 二千五百円也 山元 省三殿
- 一金 壹千円也 藤本 芳国殿
- 一金 壹千円也 田坂 真清殿
- 一金 壹千円也 賀屋ミチ子殿
- 一金 壹千円也 松宮 六郎殿
- 一金 壹千円也 宮本 勇殿
- 一金 壹千円也 杉田 艶一殿
- 一金 壹千円也 藏重 実一殿
- 一金 千五百円也 角井 英次殿
- 一金 壹千円也 野上 茂殿
- 一金 壹千円也 藤本 嗜殿
- 一金 壹千円也 水上 静生殿
- 一金 壹千円也 岡部 定殿
- 一金 二千元也 河本 靖郎殿
- 一金 壹千円也 穴水 徳幸殿

◎永代経志

- 一金 千五百円也 森本 正人殿
- 一金 壹千円也 弘中 登殿
- 一金 二千元也 舛元 義明殿
- 一金 壹千円也 岩重 宗治殿
- 一金 四千元也 夫のため
- 青木 重岡 君子殿
- 五千円也 先祖のため
- ハワイ 松本 嘉市殿
- ◎葬儀・中陰・永代経志
- 一金 貳万円也 母のため
- 山田 崎本 高市殿
- ◎葬儀・中陰志
- 一金 壹万円也 母のため
- 泉 迫 岡崎 員人殿



やさしい真宗の話

第 24 回

ある週刊誌に、次のような記事がのっていました。

「大阪・北区天満橋筋四丁目に住む今川宝一さん(七〇)は、家のものや近所でも評判のお人好し。物心両

面で何ひとつ不自由なことが、朝食後、冗談の一つもいってみんなを笑わせた今川さんが、『ちょっとお便所』と立ったまま姿を消した。家族のものは、『長いお便所』ぐらいに思っ、そう気にも

かけなかったが、夜食にも姿を見せないので騒ぎは大きくなった。八方手をつくしてさがした結果、今川さんは腹を菜切り包丁で真一文字にかき切り、淀川堤防の草むらで死んでいた。遺書には「オレはメシを食って生きるだけの価値なき男だ!」とかか

れていた。アパート、菓子製造業、鉄くず屋など多角経営に成功した今川さんは「今川のごインキョ」とみ

んなから親しまれ、六人の孫とも同居、『今川天国』といわれる程笑いの絶えない日常だった」

(関西新聞一月二十七日)

私はこの記事を読んで深く考えさせられました。人柄といい境遇とい、うらやましいほどめぐまれた、『この世のゴクラク』に住んでいた今川さんがこの世に絶望して自殺した。何という皮肉なことでしょう。現代の多くの人々が、『この世のゴ

クラク』を求めて、朝から晩まで苦勞してはたらいっているのに、一方では『この世のゴクラク』に住んでいる人が、『この世のゴクラク』に悲親して自殺する。今更の如く人間と人生について深く考えさせられます。仏教では、ワレワレ人間を『さま

よえる凡夫』『家なき旅人』として示されてあります。それは、人間の世界にはいかなる境遇にあつても、結局、安住の地はないということ在意味するものであります。私達は常に、あんなつたら任せ、こうなつたらゴクラクと、何かを念じつつ生きているのであります。そうしたネガイはたとえかなえられたとしても、私達は真底落着かせるものでは

ないということを喝破したものであります。

さすれば、私達は行けども行けども永遠に荒野をさまよひ続け、最後には、帰らぬ人となって、空しく一生を終る宿命を背負わされているものでしょうか。

結論を急ぎましょう。『さまよえる凡夫』を救うほとけがあります。そのほとけの名は

『ナムアミダブツ』

御 芳 志

◎ 年 回 志

- 一金 二千元也 泉 ヨネ殿
- 一金 壹千円也 穴水 徳幸殿
- 一金 壹千円也 村重 賢治殿
- 一金 壹千円也 松井満寿夫殿
- 一金 壹千円也 沖好 繁殿
- 一金 壹千円也 賀屋 市郎殿
- 一金 参千円也 森田 語一殿
- 一金 壹千五百円也 賀屋ミチ子殿
- 一金 壹千円也 吉兼 卓美殿
- 一金 壹千円也 木村一二三殿

◎ 葬 儀・中 陰 志

- 一金 二千元也 米本 コウ殿
- 一金 壹千円也 中崎 正視殿
- 一金 二千六百円也 益富 輝美殿
- 一金 壹千五百円也 土井 高見殿
- 一金 壹千円也 村河 助雄殿
- 一金 二千元也 米本 島男殿
- 一金 参千円也 木村 春美殿
- 一金 壹千円也 水上 金之殿
- 一金 壹千円也 白田 博殿
- 一金 壹千円也 藤重 決殿
- 一金 五千元也 柳井 佐々重増一殿
- 一金 二千元也 高林 勇次殿
- 一金 壹万四千元也 父のため
- 本呂尾 大倉 賢治殿
- 泉 迫 母のため
- 山崎 房助殿
- 青木 父のため
- 森上 薫殿
- 弟のため
- 藤生 野原 健一殿



話の真宗のいさや

第 25 回

去る四月二十九日(日)の朝九時から一時間、NHKの教育テレビで「しんらんと嘆異抄」と題する宗教放送がありました。

この放送の出席者は、東大助教授 笠原一男、東大名誉教授 小野清一郎、法政大 学教授本多顕彰の三氏で、共に「嘆異抄」(タンニショウ)の愛読者というより、信仰的にこの本にほれこんでいる方々です。

所で、「嘆異抄」はしんらんさまの著書ではありません。お弟子の唯円坊(ユイエンボウ)が、しんらんさまが亡くなられて二三十年後、耳の底にこびりついて離れない、師のおコトバを書きつづけたもので、今日でも「

かくれたベストセラー」(よく売れる本)の一つにかぞえられています。さて、放送の要点を二三ひろってみますと、先づ三氏は異口同音に、しんらんさまは七百年前の人であるが、今の時代にも立派に通用する、

新鮮な感じのするフシギな人物である。かかる大人物をワレラが祖先の中に持っているということは、大いに誇りにしてよいとほめたたえられています。

次に、しんらんさまほど、自己批判、自己内省のきびしい人は、日本の歴史上その例を見ない。みづから「愚禿」(グトク)と称せられていたように、常に「極重悪人」(ゴクシュウアクニン)の自覚に立って自己の罪悪心の根を徹底的に追求して止まなかった。この深き心において仏心を仰いでうけとった信心の境地は、「無碍(ムゲ)の一道」である、信心の極致にふれています。「無碍の一道」とは何物にもさまたげられない大自由心、雨降らば降れ、風吹かば吹けと、人生のあらゆる苦痛を一身にうけとってゆく大勇猛心であります。

最後に、しんらんさまは迷信邪教の世俗的御利益(ゴリヤク)を激しくきらった。そのくせみづからは、九十才という当時にしては驚くべき長寿を全うした。どこまでもフシギな人物である。

以上が放送の一部要旨でした。

御 芳 志

%%%%%%%%%

○年 回 志

一金	壹千円也	岩中	郡守殿
一金	壹千円也	田坂	真清殿
一金	壹千円也	藤重	春治殿
一金	壹千円也	井川	豊信殿
一金	壹千五百円也	三井	佳宜殿
一金	壹千円也	竹田	範生殿
一金	壹千二百円也	土井	英和殿
一金	壹千円也	白木	寿殿
一金	六千五百円也	父のため	年回
一金	北 町	今西	孫一殿
一金	壹千円也	河本	繁生殿
一金	二千円也	村井	基殿
一金	二千円也	富士川	嘉人殿
一金	壹千円也	清水	武殿
一金	二千円也	篠田	葉盤殿
一金	五千五百円也	年回	永代経
一金	青 木	倉重	信義殿
一金	二千五百円也	池本	ユキ殿
一金	壹千円也	佐々木	邊義隆殿
一金	壹千二百円也	下久	栄殿
一金	壹千円也	弘中	正殿
一金	壹千円也	上田	政雄殿

○葬儀、中陰志

一金	二千円也	中柴	内義殿
一金	壹千円也	竹中	虎夫殿
一金	二千円也	榊本	保殿
一金	壹千円也	森上	薫殿
一金	壹千円也	山西	政雄殿
一金	二千円也	藤中	照人殿
一金	壹千五百円也	本井	ツネ殿
一金	式万円也	母のため	
一金	麻生田	村本	頼一殿
一金	壹万五千円也	祖母のため	
一金	南 町	広本	博殿
一金	六千五百円也	母のため	
一金	藤 生	白木	助二殿
一金	六千円也	母のため	
一金	藤 生	村本	竹男殿
一金	八千円也	養祖母のため	
一金	郷	河本	守殿
○葬儀、中陰、永代経志			
一金	八千五百円也	母のため	
一金	南 町	冲原	周一殿
一金	式万五千円也	父のため	
一金	青 木	広田	尚敏殿
一金	参万四千円也	母のため	
一金	山 田	米重	健造殿
一金	式万壹千円也	夫のため	
黒 磯	地中	フシノ殿	

話の真宗のいさや

第26回

京都の東山にある浄土宗総本山「知恩院」の三門は木造門としては世界一。この三門は今から三百五十年前、徳川二代將軍秀忠公の命をうけ、普請奉行の五味金右衛門が建立したものであります。その総予算は七

万両。当時としては驚くべき巨額の費用であります。

金右衛門は天下の名匠、工匠をあつめて、この工事に着手しました。所が、工事半ばにして、これは工事予算をはるかに超過しそう

だということがはつきりました。金右衛門は一方ならず心痛しました。なぜなら、このような大工事の予算を超過した場合、普請奉行はその責任をきびしく追求せられるからです。「困ったことになった。さてどうしたものだろう」。金右衛門は思案にあまっています。わが家に帰ると、妻女に一切を語って相談しました。すると妻女はこともなげにあかるく笑

って、「何も案じることはありません

ん。知恩院の三門は私達が死んで後も永く世にのこって、参詣の人々がこれを仰ぎみることになるではありませぬか。」けなげな妻の一言で金右衛門のハラはきまりました。

この日以来、彼はもう予算のワクにしばられず、名工、名匠達に心ゆくまで腕をふるわせました。そして、この三門が見事に完成して、盛大な落慶法要が催された日に、金右衛門夫婦は自害して果てたのです。

將軍は之を聞いて感動し、夫婦の「まごころ」を永遠に記念するため三門の二階にこれを書き残しました。

げに、人間の「まごころ」ほど尊いものはなく、これにふれる人の心を激しく感動させます。

所で、人間の「まごころ」にも増して尊いものに、みほとけの「まごころ」があります。それは「ナムアミダブ」として示されています。

しんらんさまは、「ナムアミダブ」はマヂナイコトバではない。みほとけの「まごころ」の表現だと申されています。そのみほとけの「まごころ」は、「ナムアミダブ」のおい

御芳志

◎ 年回志

- 一金 貳千円也 中崎徳太郎殿
- 一金 貳千円也 野原 博司殿
- 一金 五千円也 父のため
- 青 木 高林アヤメ殿
- 一金 貳千円也 高林 一男殿
- 一金 参千円也 高林 力殿
- 一金 壹千円也 御神村ムラ殿
- 一金 壹千五百円也 岩本 軍一殿
- 一金 壹千円也 松重 義一殿
- 一金 壹千円也 松脇安寿人殿
- 一金 参千円也 谷重 誠殿
- 一金 壹千円也 藤本 嗜殿
- 一金 貳千円也 山元 省三殿
- 一金 貳千円也 藤本 末義殿
- 一金 貳千円也 岡林 洋二殿
- 一金 貳千円也 上田 修一殿
- 一金 四千円也 村河 助雄殿
- 一金 壹千参百円也 山根 儀殿

◎ 永代経志

- 一金 壹千円也 榎島 浦一殿
- 一金 壹千五百円也 井原 義郎殿
- 一金 壹千円也 棚田 菊月殿
- 一金 貳千円也 水上 修殿
- 一金 壹千円也 河本 賢一殿
- 一金 壹千円也 新川 優殿
- 一金 壹千五百円也 土井 喜一殿
- 一金 貳千円也 米重 健造殿
- 一金 参千円也 宮本林吉先祖代々
- 新 町 河本 勝一殿
- 青 木 松上 千歳殿
- 黒 磯 父のため
- 松本 正一殿
- 典子のため
- 川本 梅吉殿
- 柴田家先祖
- 北 町 二家本益人殿
- 先祖のため
- 青 木 佐々辺 始殿
- 竹重ジュウの為
- 青 木 木村 猛殿
- 葬儀 中陰 志
- 養母のため
- 津村 節義殿
- 二の本武男殿
- 養母のため
- 森上 博殿

話の真宗のやさしい

第27回

夏休みの子供達の行事に、植物や昆虫の採集があります。植物採集については、さして問題はありませんが、昆虫の採集になると、いたる所「殺す」というコトバがさかんにつかわれています。

例えば、「蝶を殺すには、胸のあたりを指で軽くおさえることです」と教えています。又、「カブト虫を殺すよい方法は、採集した時、キハツ油をマツチの棒の先きにつけ、虫の口のところへもってゆくことです。こうりと死にます。また毒ビンのなかへすぐ入れるのも、からだをいためずすみます。」と、指導しています。

理科の授業には適切な指導で、文句のつつけようがありません。しかし、イノチを断つことの痛ましさを教えたものは、あまり見受けられません。合理主義一辺倒の現代教育の盲点

が、こんなところにも現われています。

仏教では私たち人間のことを衆生(シュジョウ)とか、有情(ウジョウ)とかと呼んでいます。しかしこの衆生や有情ということばは、ただ人間だけのことを指すものではありません。それはいつも人間をふくめた、あらゆる生きとし生けるものすべてを意味するものであって、どんなに小さな虫であろうとも、みな衆生の名で呼ばれています。それは私たち生きとし生けるものは、ひとしく生命を宿し、どこまでも生きてゆきたいという願いを抱いたものとして、すべてが平等であり、同じ仲間であるということを見せているものにはほかなりません。

しんらんさまは、「一切の有情はみためて世々生々の父母兄弟なり」と語られています。その生涯をかけて、みほとけの教えを仰ぎ、深い信仰に生きてゆかれたしんらんさまにとつては、たとえ一羽の鳥一匹の虫であっても、それらはことごとく遠い因縁に結ばれた同じ仲間に見えるのでありましよう。

先日新聞に、捨て犬をひろってきた子供が、母親に叱られて、捨てに出かけ、そのまま池にはまって死んでいた記事が出ていました。深く深く考えさせられることである。

御芳志

◎ 年 回 志

一金	参千円也	今村 正雄殿	一金	参千円也	夫のため
一金	壹千五百円也	穴水 伍一殿	新 潟	河井 トヨ殿	
一金	二千円也	中柴 仲総殿	一 金	二千円也	孫のため
一金	二千円也	水上 五郎殿	一 金	海土路	川本 勝一殿
一金	壹千円也	西岡 甚一殿	一 金	二千円也	母のため
一金	二千円也	中本 栄太殿	◎ 葬儀、永代経、中陰 志	北 町	大原 園枝殿
一金	二千円也	大倉 賢治殿			
一金	壹千円也	中本 悟市殿			
一金	壹千円也	村重 由隆殿			
一金	参千円也	広田 尚敏殿			
一金	壹千五百円也	賀屋 市郎殿	一 金	七千円也	母のため
一金	二千円也	白木 十一殿			
一金	二千円也	穴水 徳幸殿			
一金	壹千円也	河本 サダ殿			
一金	壹千円也	白田 博殿			
一金	壹千五百円也	秋島 勇一殿			
一金	二千円也	蔵重 実一殿			
一金	二千三百円也	益富 輝美殿			
一金	壹千五百円也	弘中 文介殿			
一金	壹千円也	賀屋 清一殿			
一金	壹千円也	末田 和夫殿			

◎ 永代経志

一 金 壹万八百円也 先祖のため
ハワイ 村中 義人殿
赤近 ツル殿

大瀬戸キミエ殿



話の真宗のやさしい

第 28 回

新聞に出ていた二つの事件。
 一つは「八月二十一日午後九時、呉市阿賀町で、酒乱の弟を会社員の兄がタオルで首を絞めて殺した」
 もう一つは「県内美禰市伊佐町で、九月一日午後十時、新婚の市役所職員が、前科五犯で肺病の叔父をタオルで絞め殺した」

この二つの事件の犯人は、被害者の肉親であり、平素からマシメで評判のよい青年で、犯行の動機は同じように「弟（叔父）がいるかぎり一家は救われたいと思ひ、カッとなって絞めた」
 一方、殺された被害者は「一人は二十六才の青年。六年前鉄道事故で左足を切断してからグレ始め、大酒呑みで家族のもてあまし者であった。もう一人は四十九才の中年者。広島で原爆にあひ、そのうえ重い肺結核にかかり、以前製材工であったころ、左手の指三本を落としている働きのないカラダ。しかも窃盗前科五犯で酒を呑み自活の意欲がなく、金の無心で日をくらしていた」
 私はこの二つの殺人事件を出して

殺した者と殺された者の是非善悪を論ずるものでは毛頭ありません。あるものはただ人間の生きることのむづかしさについて、しみじみ考えさせられるタメイキだけであります。道理のうえからは、みんな仲よくしてゆかなければならないし、またそうすることによって、どれだけ生きることの喜びとしあわせが感ぜられるか、はかり知れないことがわかつていながらも、事と次第によつてはたとえ肉親同志でも殺しあわなければならぬという悲しい事実。それはもはや人間のアタマや心得だけでは手のとどかない遠い世界であります。
 仏教ではこうした人間の知性や理性のとどかない深い行動の世界を「罪業（ザイゴウ）」と申します。そして、いかなる善人聖者でも、事と次第によつては「罪業」が突発する可能性があると示されています。それ故、私達は大きなことは云えんわけです。いつどこで、浅ましい罪業が飛び出すかは知り知れないからであります。
 永遠の宗教人しんらんさまは「ナモアマミダブ」のホトケさまは、私の罪業を救うために、つきまりのホトケさまである」と常に口グセに語られ、みづからの罪業の深きことを悲しみつつ念仏（ネンブツ）申しておられました。

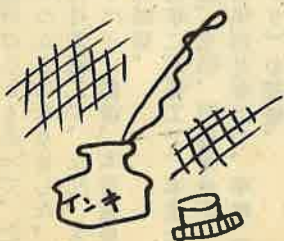
御芳志

◎ 年 回 志

一金	二百円也	野原	慶二殿
一金	二百円也	白木	サト殿
一金	壹千円也	稲本	文一殿
一金	二千三百円也	藤中	新殿
一金	壹千円也	村井	基殿
一金	壹千円也	山元	淨実殿
一金	壹千円也	村中シヅカ殿	
一金	二千円也	通谷	節子殿
一金	壹千五百円也	井原	克郎殿
一金	二千七百円也	弘中	一式殿
一金	壹千五百円也	藤重	唯義殿
一金	二千円也	松重	武男殿
一金	壹千円也	杉田朝次郎殿	
一金	壹千円也	竹原	和勝殿
一金	二千円也	崎本	高市殿
一金	二千円也	池本	ユキ殿
一金	壹千五百円也	石垣	常美殿
一金	壹千円也	藤崎	繁生殿
一金	壹千円也	村井	俊治殿
一金	壹千円也	蔵田	信二殿
一金	壹千五百円也	村岡	住人殿
一金	二千円也	野原	隆殿
一金	壹千円也	塩中	フサ殿
一金	壹千円也	岡野ヒナヨ殿	

◎ 永代経志

一金	壹千円也	村中	慶吉殿
一金	壹万円也	妻子のため	
一金	尾津	松村	健一殿
一金	二千円也	久代のため	
一金	御庄	森田	キヌ殿
一金	五千円也	母のため	
青木		岡村	瑞枝殿
◎ 葬儀・永代経・中陰志			
一金	壹万七千円也	母のため	
新町		稲本	文一殿
一金	壹万六千円也	養父のため	
中町		米奥	善登殿
青木		父のため	
岡村		裕殿	
黒磯		木村	信一殿



話の真宗の

第30回

お葬式に行つて、

「日頃から仏法を聞いていましたので、臨終の時は、心残りなく安心してゆきました」という遺族の言葉を聞いた時程うれしいことはございません。身も心も軽く野辺の送りができます。

それに反して、たとえ多くの花輪にうずもれ、各界名士の入れかわり焼香せられるような豪華な葬式であつても、

「あれほど金をかけて養生しましたが、とうとうダメでした」という遺族の声を聞くと、身も心も重苦しくなり、

「そうしてみると、死んだ後、盛大な葬式をしなくても、

の一度も聞いて、よろこんで日夜を送り、目を閉じる時に、心残りなく安心したほうが、余程の得であるとしみじみ感じます。

蓮如上人は、『仏法は元氣な時に

たしなめ、目もうすくなり、耳も遠くなり、ものみな忘れる頃になつて

「仏法に近づいても、もはや間にあわぬぞ」ときびしくさとされていきます。所が、いつの世でも人間は生活に追いまくられていきます。今の時代は特にそれが激しいようです。老いも若きも、金を得ること、地位を得ること、名譽を得ることに日夜苦勞しています。それはそれなりに意味のあることではございませうが、

「仏法を聞いていたので、心残りなく安心してゆきました。」という言葉に出あつた時、何かはっとふりかえさせられるものがあります。

人生最後の儀礼である葬式も、こうして心して味わえば、私達に人の世を生きる道のほんとうのスタガを教えてくださるようです。

御 芳 志

◎ 年 回 志

.....☆

一金 壹千円也 岩本 軍一殿
一金 壹千円也 穴水 清殿

一金	貳千円也	竹重 一枝殿	一金	壹千円也	藤重 春治殿
一金	貳千円也	白田 博殿	一金	壹千五百円也	吉柴 漢一殿
一金	壹千円也	木村 猛殿	一金	貳千五百円也	竹田 若一殿
一金	貳千円也	藤中 典殿	一金	壹千円也	水上 五郎殿
一金	貳千円也	益富 輝美殿	一金	壹千円也	藤重 決殿
一金	貳千円也	杉本 覚殿	一金	貳千円也	松重 丸殿
一金	壹千五百円也	大倉 賢治殿	一金	貳千円也	河崎 千秋殿
一金	貳千円也	河本 賢一殿	一金	参千円也	村木 頼一殿
一金	壹千円也	神田 兼一殿	一金	貳千円也	富士田完一殿
一金	壹千円也	井原フサエ殿	一金	壹千円也	尾上 慶生殿
一金	壹千円也	村中 英徳殿	◎ 永 代 経 志		
一金	壹千五百円也	藤中 数美殿	一金	貳千円也	橋本 シモ殿
一金	参千円也	今井 花子殿	一金	五千円也	高島 宣幸殿
一金	壹千円也	三井 佳宣殿	◎ 葬儀、永代経、中陰志		
一金	壹千円也	村岡 貞介殿	保津 穴水 徳幸殿		
一金	壹千円也	石垣 常美殿	大藤 篠田 葉益殿		
一金	壹千円也	賀屋 公之殿	保津 叔父のため		
一金	壹千円也	岡崎 賦殿	保津 母のため		
一金	壹千円也	古川 勇二殿			
一金	壹千円也	村重源太郎殿			
一金	貳千円也	藤本 末義殿			
一金	参千円也	米重 健道殿			
一金	貳千円也	山崎 房助殿			
一金	貳千円也	森上 薫殿			
一金	参千円也	野原 健一殿			
一金	参千円也	村本サチエ殿			
一金	貳千円也	赤崎 久子殿			

